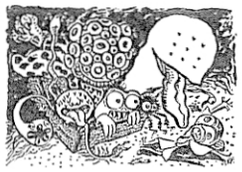

紙芝居パリにいく

——その1——

堀内誠一
（画家）

パリで紙芝居を演りたがっているフランス人がいる。という話を、パリに住んで日本の絵本や児童文学の紹介をしたり、クラマール児童図書館の仕事を手伝っておられる山口智子さんにきいた。

背景が次々と変わる、紙の切抜人形劇はいまでもイギリスに残っているらしいが、日本のような紙芝居は我が国の特産で外国に例がない。

けれど、ちょっとクタびれたオジサンがモンマルトルの街灯の下で自転車を止め、子どもたちを集めてる図なんかは、仲々ピッタリの風景のように思える。ジャック・タチの映画みたいである。こりゃ面白いぞ、ひとつ自分で描いたのを持って行って、その人に演ってみてもらおう、と大乗り気になった。

望めば天使は降りてくる、だったか、待ってなきゃ天使がソバにいても解らない、だったか、そんなコトワザだか、リルケの詩だかがあったっけ。

そんな折、童心社から紙芝居を描きませんかと依頼があり、二つ返事でお引き受けしたのだった。

松谷みよ子さんの民話シリーズの一つ、「したきりすずめ」で、これを引き受けたもう一つの理由は、いちばん最後の場面をサッと引くところ、つまりツヅラからお化けたちがドロドロ出てくるとこの感じを、とにかくつかめる気がしたからだ。これなら自分が子どもの頃、コワーい紙芝居をゾクゾクして見た感動を外国の子どもにも伝えられると思ったからである。

私の紙芝居の記憶はとにかくコワーいものだったということしか残っていない。なぜか、夕暮れちかく紙芝居屋サンはやってきたような気がする。

それは日華事変から空襲までの時期、東京は本所向島というところで、だいたいが〝本所七不思議〟なんて怪談が生まれたところだ。

三囲（みめぐり）神社とか一つ目通り、三つ目通りという名前もちょっと怖い。いまは埼玉の方に移ったらしい雛人形の首つくり屋と女剣劇の座長の家が我が家をはさんでいた。お向かいはヤクザの組長の家で、時々日本刀をひっさげて目を吊りあげた男の人が飛び出してくる。近くには隅田水上警察の土左衛門置場があり、東武電車のガード下では、夏場になると荷を引いてきた馬が涼しいてんで休んだり、お産をしていた。母親馬は自分の胎盤をぺろぺろたいらげて、子馬を並べてまた荷を引いて出発して行った。コウモリの飛んでくる隅田公園には首吊りが盛んで、人間、首を吊ると鼻水から小便まで出しっ放しになるモノだということを見て知っていた。もう、こんな面白いトコロはインドのベナレスあたりに行かなきゃお目にかかれない。

紙芝居屋サンも一様ではなく、特に警察の検印無しのヤツがコワーくて面

白かったのだが、そういう出し物を演る人にかぎって子どもにアメだけ売りつけて逃げるから、皆で注意していなけりゃならない。逃げる自転車を追っかけて行ったり大変だった。

不思議なことに紙芝居屋のオジサンの顔は憶えているが、筋は？　となると全然記憶にないのだからあきれる。紙芝居は演技者の存在が重要だということはそれで証明できるだろう。

あんまり自己陶酔が激しくて、なかなか次をメクらないオジサンもジレったいが、子どもの方をちっとも見ないで画面の方ばっかり顔を向けてる臆病なオジサンもツマらなかった。ちょうどバランスがとれて見事に一巻の終わりになった日は実に爽やかで、子どもごころにも人生は素晴らしいと思えるのであった。

絵が生きるのも死ぬのも演技者の手腕にあるのだから、絵を描くほうは実に気楽なものである。

ただ万が一、自分が演らなけりゃならないことになったとき、声色やなんかのへたなのをカバーできるように表情をハッキリつけておかなければならないと思った。

＊　＊

パリで紙芝居に興味を持っているという青年はブルーノといい、ひげのせいでオッサン風に見える心優しい人物であった。

彼は子どもたちをいかにして集めるか、というメルヘンの笛吹き男の「笛」に代わるものにコッていた。友人前衛彫刻家がカルダー風の楽器（ミュージック・スカルプ）彫刻を作っていて、これは鉄のコーモリとメガホンをくっつけて、あちこちにピアノ線やプラスティックスの棒がめぐらされている奇妙なモノで、ピアノ線をたたいたり、水でぬらした指でプラスティックス棒をこするとブォオォ——ンと不思議な音を発生する。これを置いとけば、これだけで子どもはけっこう面白く遊べるので、集まったところで紙芝居を始めようというわけである。なるほど、紙芝居の習慣のないところでは、そういうことから始めなければならないのだろう。

この彫刻を置いて、最初に私の「したきりすずめ」を演ったのは進歩的なクラマール児童図書館であった。日本の絵本にも詳しい館長の許しを得て貴重なカリキュラムの一部を使わせていただき、山口智子さんがフランス語で演じた。

紙芝居の持っていた魔力は絶大なもので、子どもたちは、この服装も習慣も民族的気質もたいへん日本的な紙芝居に全身うつつをぬかしていた。熱中のあまり椅子からころげ落ちた子も落ちたまんまのかっこうでラストまで目を離さなかった。最後の場面では全くおったまげていた！

（次号につづく）

亡き巽先生へ

古世古和子
（児童文学作家）

祭壇から笑いかけておられる先生へ、一歩一歩近づきながら、私は「たきび」の詩をくちずさんでいた——。

巽先生に私がはじめてお会いしたのは、昭和二十七・八年頃、地域の作文の会の研究会のおりだった。研究会ののちに、赤い鳥童謡運動についてお話を伺う機会があったが、先生のおことばはわかりにくいな、とその時思った。その後、児童文学の同人誌仲間で新美南吉の研究会をもったり、文学雑談の中でお話を伺ったりしてきたが、先生が私にいって下さったおことばで、はっきりと耳に残っているのは、「旦那さんに仕事をさせろよ！」「子どもや家庭に負ける な……自分の仕事の時間はもちろん大事に……」である。私が、夫の仕事（考古学研究）を尊重しているといいかけると、「こらっ、うちの女房と同じことをいうな！」と、ポン！　と背中をたたいて、「ふたりでたきびをすることも大事……」と、語尾はにこっと笑った口の中へ消してしまわれた。——巽先生、先生のおことばを思いおこしながら、私はこの後もたきびの歌を歌います。

（昭和四十八年五月八日記）